



行き交う

一步先のあなたへ

永田 和宏

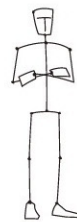


23 コミュニケーションの基本

アナログとかデジタルという言葉も、もう普通に使われる言葉になってしまった。デジタルはデジタル、つまり指に由来する言葉である。指折り数えるというように、離散的な量の表示である。

アナログは連続量と訳されることが多いが、もともとはアナ(類似の)とログ(論理)に由来する言葉である。ある量を別の何かの量に変えて表示すること。時間という連続量を、文字盤の上の針の角度で類似させたり、温度を水銀柱の高さで近似させたりする、これらがアナログ表示。いっぽう、デジタル時計では、連続量である時間を数値化する。標本化するのだと言ってもいいだろう。連続量を離散量に標本化する作業だから、どんなに細かく区切っても、量

と量のあいだには空隙が残る。我々はアナログの世界に生きている。1分2分という区切りに関係なく時間は私のなかを流れているし、空気にもその匂いにも境界はなく、数えることはもちろんできない。



そんな世界にあつて、感覚としてアナログを捉えることはできても、それを表現することはできないのである。表現した途端にそれはアナログからデジタルに変換されてしまうからである。アナログ世界は表現不可能性のなかでのみ成立しているとも言える。「今日は38度もあった」と言えば、38度という数値は理解できるが、その暑さは38という数値のなかにはない。

表わせない時、言葉のデジタル性を痛感する。言葉と言葉の間にあるはずのもっと適切な表現をめぐって苦闘する。感情を含めたアナログ世界のデジタル表現に挑もうとするのが、詩歌や文学における言語表現である。折に触れてコミュニケーションの大切さが言われるが、私たちはともすれば、デジタルをデジタルに変換しただけの作業をコミュニケーションだと錯覚しがちである。「この文章の意図するところを五〇字以内でまとめよ」式の、言葉の指示機能の反復レッスンは、デジタル表現を別のデジタル表現に変換する練習にしか過ぎない。



何も数値化だけがデジタル化なのではなく、言葉で何かを言い表わす、そのことがすなわちデジタル化そのものなのである。言葉で表わすとは、対象を取り出して、当てはまる言葉に振り分ける、すなわち分節化する作業である。外界の無限の多様性を、有限の言語によって切り分けるという作業なのである。

一本の大きな樹がある。「大きな」という言葉の選択の裏には、「見上げるばかりの」とか「天にも届きそうな」とかの別の表現が、潜在的な可能性として存在したはずで、そんな可能性をすべて断念した表現が「大きな樹」という便宜的な表現になったのである。その樹の全体性には少しも届いていない。「言葉には尽くせない」という表現自体が、言葉のデジタル性をよく表わしている。

人は自分の感情をうまく言い

デジタルをデジタルに変換するのはコンピュータの得意とするところであるが、唯一コンピュータにできないことが、デジタル情報のアナログ化である。コミュニケーションの基本には、もともと言語化できないことを前提としたアナログとしての感情や思想があり、それを便宜上デジタル化した言語で相手に伝えるのである。伝えられたほうは、単にデジタル情報として読み取るのではなく、デジタル情報の隙間から漏れてしまったはずの相手の思いや感情を、自分の内部に再現する努力をしてはじめてコミュニケーションが成立する。真のコミュニケーションとは、ついに相手が言語化しきれなかった「間」を読みとろうとする努力以外のものではないはずである。それがデジタル表現のアナログ化であり、別名、「思いやり」とも呼ばれるところのものなのである。

京都産業大教授(細胞生物学)、歌人

※コラムへの感想をメールでお寄せください。minna@mb.kyoto-np.co.jp

我々はアナログ世界に生きている
言語化できぬ間を読む努力をする
唯一コンピューターにできないこと